

# 矢岳高原のイワクラの現状

理事 谷口実智代

## ● はじめに・・・「イワクラサミットin宮崎」終了後の宮崎

昨年2005年7月17日から19日まで、現地調査も含めて3日間行われた「イワクラサミットin宮崎」は、九州で初めてのイワクラサミットという事もあり、開催時までそれほど話題に上ることがなく、告知に苦労した。しかし、オープンング企画として開催した須田郡司氏の写真展が新聞紙上で取り上げられ、少なくともマスコミに対する認知度は当日までにかなり上がったと思う。また、当日も新聞の取材や、現地調査の様子がローカルニュースで報道されるなど広く報道され、一般への「イワクラ」の認知度が急激に上昇し、言葉としてはか

なり浸透してきたと思う。イワクラサミットに対する評価も、今まで知られていなかった世界を教えてもらった、自然の中に当たり前に存在する「石」に意味があった、またそのことで県外から大勢の人が来てくれたことに対する驚きなど予想



その後の矢岳高原のイワクラ

## ● その後の矢岳高原のイワクラ

現地調査で訪れた宮崎県えびの市にある矢岳高原の巨石群は、正直にいうと現状は何も変わっていない。当時から引き続き矢岳高原古代祭場保存会の皆さんによる保存活動と、地元の西川北地区によりグリーンツーリズムの一環として遊歩道の整備計画が進められているが、具体的な進展はないようだ。また、国有林内に存在する巨石群は特に破壊されるということもないが、間近に牧場開発が迫っていること、送電線、携帯電話の鉄塔建設が今後予定されないという保証はない。また、保存会の研究対象外であった矢岳高原ベルトンオートキャンプ場敷地内およびその周辺にも巨石群の一端をなす石組み立石が存在すると思われる。それ

らの調査と地図への落とし込み、周辺の考古学的調査が望まれるところだが、具体的な動きはない。がしかし、イワクラサミット終了後、一般の参加者から平成十六年八月に発行された「南九州縄文通信」十五号の中で藤木聡氏の「縄文時代の矢岳越え」という論文の中で、矢岳高原周辺から縄文草期から早期にかけての石器や集石遺構などの遺物散布を発見したことが報告されていることを教えていただいた。公的な学術調査ではないが、専門家による矢岳高原の考古学的な調査により矢岳高原周辺が古代から人が暮し行き来する地域であったことの裏づけを得ることが出来た。





## ● 矢岳高原のイワクラ保存 に対するアプローチ

イワクラサミットin宮崎では、矢岳高原の巨石群の他に北斗七星の形に並ぶ巨石を祀る神社も合わせて発表させてもらった。さすがにこの神社に対しては地元への反応がよく、観光案内などにもよく登場するようになった。(ただし、「北斗七星」は抜きである)このように神社に祀られている巨石と違って、矢岳高原の巨石群はその多くが「ただの石」としての認識しかなかった。以前から知られていた「笠石」、昭和のはじめまで雨乞いが行われていた「トゲ石」などは市の教育委員会のほうでも認知されている。しかし、それ以外の巨石はまったくといって良いほど知られていない。以前、古代遺跡研究所所長の中島和子先生のご尽力により発見された古代祭場の石組みは、矢岳高原古代祭場保存会を中心に宮崎県への文化財指定の申請を行われ、県の担当官も現地を訪れたが、このような巨石遺構の専門家がいないため遺跡であるとの確証が得られ

ず、文化財指定は見送りとなったと聞く。

このように神社等に祀られていないイワクラの保存を考えた場合、やはり最適なのは文化財として保存されることだろう。そのためにクリアしなければいけない問題点はいくつかあるので次章に譲るが、まずは「ここにイワクラがある」ということを地元を中心知ってもらう必要がある。もちろん、その方法には充分注意をしなければいけない点もある。今回、矢岳高原の巨石群全体に対してサミットの現地調査報告書として意見をまとめ、行政や関係機関に報告をした。地元の自然や文化財を活かしたグリーンツーリズムへのアプローチの有効性、文化財としての学術的価値の可能性、またこれが人の手が加わっていない全くの自然物であっても、その特異性は、市指定文化財としての価値は充分備えているだろう。

## ● 矢岳高原およびその他のイワクラ保存の問題点

矢岳高原はもちろん、その他の山

間部にもまだ知られていない巨石群、イワクラが多数存在している。サミットの交流会の会場でも地元への参加者から日向市の石神山、都農町の尾鈴山山中の巨石などの情報が寄せられた。まずこれらの保護を考えた場合、もっとも重要なことは「地元の理解」である。たとえば、古墳などの遺跡であっても専門家の目だけで全てを監視することは難しい。明らかに人工物である遺跡が「手違い」により破壊される例は、決して少なくない。それが、人工物なのか、自



然のものなのか判断のつきにくい「石」ならば、なおの事である。それでもなお、矢岳高原の笠石やトゲ石のように地元の人々に語り継がれてきた巨石ならば、文化財の指定などなくても大切にされ続けるのだろう。そして文化財の指定には、地元からの働きかけの力は大きい。たとえば、大分県真玉町の猪群山ストーンサークルは、地元でも知られた珍しい自然の地形として昭和53年に町指定の文化財とされた。また、宮崎県の北郷町にある山小屋トンネルは、宮崎県ではじめて造られたトンネルでありながら、もつと交通の便の良道が造られ、通行しなくなつて久しく、ごみの違法投棄に埋もれていたが、地元住民の手により清掃され、その働きかけが認められ県指定の文化財となった。これなどは文化財としての資格が充分ありながら忘れられ、捨てられていたものが地元住民の熱心な行動により文化財指定された好例である。

祀られもせず、言い伝えや記録もなく、地元でもすっかり忘れられた巨石を「イワクラ」として認知して

もらうことは、とても難しい。また、地元住民さえ納得させられないものをどうやって文化財指定させられるのか。「これがイワクラである」という根拠が必要である。そして「イワクラ」と「ただの石」を見分ける目、それを持った専門家としてイワクラ学会の会員が認知される必要を感じる。



## ● 消えたイワクラ

いままで「イワクラには保存が必

要」という前提で話を進めてきたが、果たして本当にイワクラは保存が必要なのか、どんなイワクラが保存されるべきなのかという論議もなされて良いのではないだろうか。全く忘れ去られたイワクラは、人により「必要ではない」と判断され、自然の中



に帰った姿ではないか。そうやって消えていったイワクラも少なくないただろう。

矢岳高原巨石群の中に、送電線の鉄塔が建っている。そこには、鉄塔

建設のため破壊されたイワクラの跡が見て取れる。だがもちろん、このイワクラは地元では全く知られていない。また、これがイワクラであると言っているのは、おそらく私だけだろう。

田野町の「百済王の雨宿岩」は、川辺にひさしのように突き出た巨石であったが、大雨により倒壊し、それでも語り継がれてきたが、昨年の台風14号による大規模な土砂崩れ

によりその存在が確認できなくなってしまった。

清武町の乳岩という巨岩には、オツキオンジョ岩、オツキバジョ岩というまるで狢犬のように付き従う巨石があると地元で語り継がれてきたが、その言い伝えを継承するコミュニティの弱体化に伴い忘れ去られ、道路開通にあわや倒壊のところがぎりぎりで逃れ、現在むき出しの状態です。それら絶滅寸



前の巨石を「イワクラである」と断じる根拠、そして保存を地元にくつたえるだけの説得力を持つ根拠がほしいのだ。

● 提案「イ



田野町百濟王の雨宿石

「イワクラ学」の  
確立を！

イワクラ学会が設立されて久しい。日本全国からのイワクラの情報もかなり寄せられていることだろう。それらの全てがイワクラなのか。ただの石なのかの分類。またイワクラであればどのような種類のイワクラなのか。信仰の対象としてのイワクラなのか。遺跡としてのイワクラなのか。人工物なのか。全くの自然物なのか。どのような年代のイワクラなのか。それらを統計的に選別できる「イワクラ学」の確立が望まれる。これは、由来のわからない石をイワクラであるとイワクラ学会として認定できる学術的根拠となるだろう。それ以上にイワクラの保存を訴える場合の強力な味方となる。ぜひ、イワクラを学術的に判断する基準を設けようではないか。今後このようなサミットの場合、または学会誌上で、イワクラ学についての体系が組み立ていくことを、切に望む。そして、文化財指定の際にイワクラ学会としての意見を求められ、「これはイワクラである」と誰もが納得できる根拠を提示し、ひとつでも多くのイワ

クラが保存されることを祈る。

了